第2項　期待されるコミュニティの役割

被調査者が若者であった頃は、「こわい」、「うるさい」、「怒る」大人が地域に存在したようである。そして、このような大人が若者に対して注意をするなど、地域の教育力が機能していた。地域が若者を監督する役割をも担っていたのである。

しかし現在、地域の若者に対して、大人が注意したりできなくなってきていることは、先述したとおりである。都市化、核家族化の影響も手伝い、いわば「地域ぐるみの教育」が機能しなくなってきているのである。

大人は、このような現状に嘆いている。そして、自分たちが若者であった頃、コミュニティが持っていた機能を再生する必要があると語る。被調査者が期待しているコミュニティの機能としては、主に2つ挙げられる。1つは、子どもに注意を向けてくれる大人が増えることで、子どもの生活の安全が保たれることである。そして2つ目は、親の目の届かないところで地域の大人が教育を施してくれることが、若者の逸脱的な行為を抑制することにつながるのではないかという期待である。なお、非行以外にも、親以外の大人とのコミュニケーションをとる機会が増えることによって、違う世代とのコミュニケーションの取り方や、相手の立場を思いやる力を養えるという教育上の役割が期待されている。

本項では、まず、「1.コミュニティの連携の再生」において、（以前みられたような）コミュニティを再生するためには、どのようなアクションをおこす必要があると被調査者が考えているかについてまとめる。これに関連して、2.では、多くの被調査者が異口同音に語っている「地域の住人が顔見知りになること」の重要性について検討していく。そして、3.～4.にかけて、家庭および学校において、被調査者が、今後どのように若者を教育していくべき（または教育してほしい）と考えているかについてまとめる。

1.　「コミュニティ」の連携の再生

繰り返し述べてきたように、被調査者は、コミュニティの連携が失われていると感じており、その再生を願っている。では、どのようにしたら、コミュニティの連携を取り戻し、「若者を注意し、若者を叱れる社会」が再生されるのだろうか。この点に関して被調査者へインタビューした結果を、以下のScene.4-5～4-7にまとめる。

［Scene.4-5］　グループ 12

R：じゃ、自分の子が、他の人から注意されてるとかって気がつかないですか？

S2：いやぁ。他の人は見とるわぁ。

S1：あそこのうちのあの子があんなことしたって、一日のうちにウワサになっとるわ。

S1：見てるよね。

S2&S3：見てる。見てる。

S1：見ることは見てる。そして、注意はしない。

S2&S3：そうそう。

S2：言うか、言わないかやね。

S3：そうそう。そして、ワーッとウワサになる。「あそこの子は悪い」とか「あそこで万引きしたといね」とか流れるみたいやよ。本人には注意せんけどね。ま、ウワサ好きな人は好きやから。温かい目で見るんではなくて。

S2：他人事やから。

S1：私は近所の子には声をかけるようにしとる。そういうのが必要かなって思うし。

S3：難しいね。どこまで注意するかっていうのは。

S1：注意は、ね。できんかもしれんけど。声かけてあげる程度は。

S2&S3：うん。

［Scene.4-6］　グループ 1

R：最後に、大人が、一社会人として、何かしてあげられることがあれば、それは何だと思いますか？

S1：してあげられることはないと思う。してあげるじゃなくて、すべきことなんだよ。子どもたちのためにしてあげるなんておこがましいことじゃない。昔は、子どもたちのためなんて考えなかったもん。自分たちの生活のためにやってた。子どもたちも自分の生活のための一員だったから。だから、子どもたちも家の手伝いをしないと、生活が回らないんだよ。親なんかは畑に行ってるわけだからさ。お風呂なんかは俺が焚かないと入れなかったし･･･。つまり、家族の一員だったわけ。でも、今は、けっこう余裕があって、子どもたちのためにっていうと、聞こえがいい。大人たちがやっぱり、規範をみせないと。だから、大人たちが、見て見ぬふりをしないこと。ダメなものはダメってちゃんと言わないと。道路にごみが落ちてたら、大人が率先して拾う。自転車が倒れてたら起こす。そういうことはでき

るじゃない？子どもたちに注意することじゃなくて、子どもたちに大人の後姿を見せることなんだよ。

R：子どもに直接注意するんじゃなくて、大人が行動で示すってことですか？

S1：そう、それが一つだね。本当に悪い子って少しはいるよ。どんな世の中だって。

R：昔の本当に悪いっていうのはどんな感じですか？

S1：それは、けんかはするし、恐喝はするしっていうやつ。犯罪まがいの。

R：今でも同じですかね？

S1：今だと、いじめるとか、恐喝とかかな。中間の不安定な子がいるじゃない、ちょっと押したら元に戻りそうな子。そういう子を、我々素人が、どうすることができるかを考えるほうがいいよね。でも、本当にダメな子、例えば警察に突き出されるとかは別な話だけど･･･。ちょっといきがって、間違えると悪い方にいっちゃうかなって子を、後ろからぽんと押してあげる。そういう子は、タバコとかかな。そういう子を見つけて･･･。

R：例えば、タバコを吸ってるのを見かけたら、一声かけてあげるとかですか？

S1：こっちがビックリするような恰好をしてる奴は、それは声かけたって無理だよ。そういう奴はもうしょうがない。でも、そんなのは一部だしね。最近の大人は、ニュースとかの影響で、ほら、なんか返り討ちにあったとかっていう話を聞くじゃない、だから、過剰に怖がりすぎてるんだよね。そうじゃなくて、そんなのはごく一部なの。本当に悪いのは。そういうのはもういい。しょうがない。でも、更生できそうな子にはどんどん声をかけていかなくちゃ。それが大人のできることなんじゃないかな。

S2：そうそう。

［Scene.4-7］　グループ4

R：最後に、若者の非行行為に対して、他人の大人や社会が貢献できることはあると思いますか？

S1：地域でその非行少年を恥をかかないことかな。地域で何かを集団でやるって時に声をかけてあげて取り込んでいく。一対一でその子をどうにかっていうのはできないけど、地域なら一人の非行少年を取り込んであげることはできると思う。私たちが個人的にその子と話し合ってというのは無理かもしれないけど。

S2：大勢の中でその子を囲ってあげれば、非行少年に見えないかもしれないし。

S1：そうそうそう、悪いことできないものそうすれば。

S2：なんとなくそうすれば、その子も溶け込めるんじゃないかな。かえって大勢の中に入れてあげれば･･･。

S1：それはやっぱり地域の力だよね。だけど、田舎はそうやって取り込めるけど、今問題になってる非行少年とかってのは都会じゃないのかなぁ･･･。その辺は、どうしていけばいいとかってのは想像つかない･･･。

S2：うん。

Scene.4-5 では、「(周囲は) 見ているが注意しない」、「他人事」、「温かい目でみない」、「ウワサ好き」と、地域の住人に対する信頼が薄れてきていることが示されている。しかし、このような現状に対して、被調査者は「(逸脱的な行動をなす若者への) 声かけが必要」、「注意するのは難しいが、声をかけるくらいはできる」と語っている。大人たちは、地域の住民と若者との対話の機会を増やすことを重要視しているのが分かる。

さらには、「大人たちが、見て見ぬふりをしないこと」(Scene.4-6) が重要であり、「ダメなものはダメってちゃんと言わないと (いけない)」、「最近の大人は、ニュースとかの影響で、(若者を) 過剰に怖がりすぎてる」と、逸脱的な行動をとる若者に対して毅然とした態度をもって接するべきだと述べている。また、「子どもたちに注意することじゃなくて、子どもたちに大人の後姿を見せるこいなんだよ」と、注意するだけではなく大人がしっかりとした規範を示す必要性を挙げている。

Scene.4-7 でも、地域ぐるみの働きかけが、若者の逸脱的な行為の抑止力として作用する可能性について言及している。具体的には、「一対一でその子をどうにかっていうのはできないけど、地域なら一人の非行少年を取り込んであげることはできる」、「地域でその非行少年をはじかない」、「地域で何かを集団でやるって時に声をかけてあげて取り込んでいく」といったような内容である。

第 1 節にも示したように、「非行少年」、「不良」とは、大人が若者のある行為に対してレッテルを貼り、逸脱視するプロセスにおいて可視的になる。しかも、第 3 節で言及した通り、現在は、逸脱的な行為をなす若者に対して、大人が「異端視しながらも無視する」という現象が生じている。しかし、若者を「異端視しながら無視する」メカニズムに対して、大人たちは警鐘を鳴らしはじめている。それは、インタビューを通して語られた、「大勢の中でその子を囲ってあげれば、非行少年に見えないかもしれない」、「かえって大勢の中に入れてあげれば非行や不良には見えない」という発言にも見てとれる。そして、このような社会を再生するには、「やっ

ぱり地域の力」によるところが大きいと認識しているのである。

2. 顔見知りになることの重要性

かつて被調査者が若者であった頃は、逸脱視される行動をとった若者に対して、大人が注意することが頻繁にみられたようである。しかも、「怒られたね。悪いことすると誰でも」（第 3 節第 2 項 Scene.3-15）という発言に見られるように、その若者が誰であれ、何らかの制裁が課されていた。しかし、現在は、相手が顔見知りの若者であれば注意をすることができるが、そうでない場合は注意することに躊躇ってしまうようである。そこで、「大人が叱る社会」を再生するためには、地域の住人と顔見知りになることが必要であると指摘する発言が所々にみられた。以下、そのインタビュー結果を Scene.4-8 、Scene.4-9 に示す。

［Scene.4-8］　グループ 14

S4：近所で見かけた子とかには目を向けてましたねぇ。どこの子がどういうことをしているのかは目があった‥。

S5：だれだれさんちの子、というのは分かりましたよね。ま、それが今、隣近所が分からないっていうことがあるじゃないですか。

S5：地域社会が確立されていないっていうか、マンションだったり、いろんな所からいろんな人が来てるから、やっぱりずっとそこにね、入れ替わりが激しいから、地域社会が育つっていうのが…。昔はその子が赤ちゃんの時から大きくなるまで、ね、今はね、隣のうち‥

S2：分からない…

S3：となりの家にね、いつ誰がきたのか分からない…。

［Scene.4-9］　グループ 6

S4：親が今、近所付き合いをしない人が増えてるよね、そうすると、近所付き合いしていると、あそこのうちは中学生の子がいるとか、高校生の子がいるとかあるけど、「何年生になったんだろう？」とか、極端になると「あそこは子ども何人いたっけ？」みたいな感じになってくると、注意どころじゃないよね。

S1：どこの誰ちゃんだか分かんないんだもんね。

S2：だから、目のあるところっていうのは、目の届いてる間は大丈夫なんだよ。目が届かなくなると･･･、だから、中学生のうちは、もうみんな、田舎だから分かるんですよ、「あの子は誰」「親は誰」っていうのが、分かってるから、子どももそうは悪いことはできないよね。

S5：昔は近所の子として付き合ってたけど、今は近所よりも子どもの同級生とか、自分の友達の方がね。

S2：親も、自分の気の合う人とじゃないと付き合わない。昔はねぇ、合う人合わない人も含めて、近所付き合いしてたもんね、一通りは。

R：近所付き合いが薄くなったとか、地域の目が届きにくくなったとかっていうのは、子どもの成長とか、教育に何か影響を与えると思いますか？

S3：今は、学校でも、先生だけじゃなくて、地域も巻き込もうっていう流れにいってるみたいですよ。うちなんかは、けっこう街なかの中学校なんで、乱れやすいっていのもあるので、何かしても目立っちゃう学校だから、先生たちだけじゃなくて、地域の人も一緒に来てもらおうっていうふうにはなってると思うんですけど、なかなかね。

S4：たくさんの人にみていてもらうっていうのが、いいんだよね。自分の子どもは、親だけが成長させてるんじゃなくて、どっちかっていうと、よその人たちがみて、言ってくれることのほうが、成長するって。

S3：そうだと思う。

S4：だから、たくさんの人にみていてもらったほうが、子どものためにはなるよね。

Scene.4-8 にあるように、「だれだれさんちの子、というのは分かりました」と、以前は地域の大人と子どもとに面識があった。しかし、現在では、「今、隣近所が分からない」（Scene.4-8）、「どこの誰ちゃんだか分かんない」（Scene.4-9）という状態を懸念している。

逸脱的な行為を抑制するために、大人と若者相互に面識をもつことは、2 つの側面から重要な意味を持つ。若者の側として、大人と若者との面識があれば、若者自身も逸脱的な行動をとりにくくなる。大人の側としても、逸脱的な行為を犯している若者との面識があれば、第 3 節第 2 項で見られたような、若者からの仕返しを怖がることも少なくなるであろう。地域の大人と若者とが面識があることは、Scene.4-9 で「目の届いてる間は大丈夫」と述べられるように、非行の抑止力として作用すると考えられる。

3. 家庭における教育への提言

被調査者が若者であった頃、子どもが逸脱的な行為を犯した場合、必ず叱責し、怒り、注意する親の姿があった。しかし、現在は、勿論怒ることもあるが、見て見ぬ振りをする等、自身の子どもの逸脱的な行いに対する親の対応は、以前のそれとは異なる。

このような現状を鑑み、大人たちは、親の家庭における子どもの教育はどのようにあるべきだと考えているのだろうか。以下の Scene.4-10～4-12 に、家庭内の教育力のあるべき姿に関する大人の意見をまとめる。

［Scene.4-10］　グループ 12

S3：最初から、親にはなれんのです。でも、親としての自分の思いを言うっていうか、世間の「自由」ていう言葉に惑わされないで、そんな意識が必要かなって思う。だから、親も試行錯誤、悪戦苦闘。でも、世間に流されていいものと、ダメなものは、大人が判断するべき。子どもはわかんない。子どもが大きくなってから、思うんやけど。遅いなって思う。非行や不良っていう行動には、なんかの理由があると思ってあげなあかんって、いつも思う。その子らも厳しく叱って欲しいと思ってると思う。言い方にもよるけど。

S2：今、忙しくて、家族が顔を合わせる時間が少ないやろぅ。ご飯はたいてい、笑顔で食べるものやから、なるべくみんな集まって、子どもが居心地よくなるように、注意するにしろ、ただがみがみ言うんじゃなくて、わかってもらえるように話すことが必要かなって思う。（うちの子にも）すればよかったなって。

S1：考えさせることをしなかったかなって思う。いつも、私は親なんやし、しっかり育てなって。こどもが、その状況状況で、一番いい状況を与えすぎて、判断できないような子にしたツケが、今来てるって思ってる。そのときに「どう思ったんや？」とか、「どうしたい？」っていう言葉かけがなくて、「こうしなさい」とか、「こうしなさい」とか、導きすぎたかも。

S2：そうそう。

［Scene.4-11］　グループ 14

R：悪いことをやっている子どもを叱るというと、やっぱり田舎、例えばI地区でしたらそういう（近

所の子どもを叱る）ことが簡単にできたということですか？

S2：相手のお母さんが何もおっしゃらないから。

R：あ、なるほど。

S3：親との信頼関係があるから言えるんじゃないかな？親とのつながりがねえ、やっぱり。だから怒ってもその子が悪いんだから、向こうも何も言わない。当然でしょ、っていう感じだけど、逆にこっちで･･･。

R：子どもを叱るときには当然背後というか、親御さんのことをイメージされるという？

S4：言うと言い返されるという場合を聞くとかあるじゃないですか。だから先に敬遠したりとか。

S3：っていうか、親自身がもう考え方が違うとかあるじゃないですか、ちょっと常識に欠けているとか。ただそういう親に対しての子どもだったら、もう言っても･･

R：しょうがない、というか。

S3：うん。親自身が同じような考えだから･･

Scene.4-10 にあるように、家庭において、子どもに「親としての自分の思いを言う」こと、その際に「わかってもらえるように話す」ことが必要と考えている。そして、親が子どもを導くだけではなく、子どもに自らの振る舞いを「考えさせる」機会を増やすことを提言している。

また、Scene.4-11 では、「親自身がもう考え方が違う」こと、「『誰々ちゃんは～』なんて言った日には、その親が黙ってない」というように、親対親との信頼関係が失われつつあることが示されている。よって、「親とのつながり」が失われつつある現状を打破するために、「隣近所の輪を広げておく」必要があると述べている。

4. 学校における教育への提言

中学生や高校生の生活の大半を占める「学校」の役割としては、地域の「交流の場」としての学校を構築していこうとする提言がみられた。インタビュー結果を以下の、Scene4-12、4-13 に示す。

［Scene.4-12］　グループ 11

S3：もっと学校教育の中で「ここまでしたら大変な罪になるんやぞ」っていう、ようするに犯

罪教育みたいな、そういう風な教育が必要なんやないかな？講師として警察の方が来て、講演してもらってとか、よう話してもいいし、そういう、昔、道徳とかあったけど、道徳言うとイメージ悪いけど、そうじゃなしに、犯罪とかやられたほうは大変な迷惑なんやぞって、それを自分がやられたら本当に迷惑なんやぞって。それは、教育していくべきやし。親も教育せんなんし。親がそれをしない親もおるし。学校での教育って言うのは、社会に出て、普通の生活していくために、必要な教育。しなくちゃいけないことだと思う。学校の先生が話さなくても、弁護士の方やそういう事例とかを出して？先生だけが教える人じゃないと思うやて。そういう時間があってもいいんじゃないかな？マナーの時間っていうか。

S1：結局、事件がおきたときは騒ぐけど、その後、その人が苦労したことを知らないで終わっているから、やった間違いを、いつでも繰り返しで。

S2：俺は落ちこぼれるから非行に走るんじゃないかなと思う。ついてこられたらいいよ？でも、僕らん頃より(学校の勉強は)難しいって。

S3：(自分たちの頃と)授業のカリキュラム違うもんな。かわいそうや。

S2：俺ら子どもの勉強わからんけど生きてかれるもんな。やりたい仕事があって勉強するならわかるけど。勉強できなあかんっておかしいわ。勉強できんでも生きていかれる環境つくらなな。

S1：せやな。

［Scene.4-13］　グループ6

S1：うちの子どもは去年、1年にあがったときには、2年生が大変だった時期だったのね。で、いろいろクラスのもめごとが多かったんですけど、2年生たちの親が、学校に行って、授業態度を見たりとか、そういうことはあったんだけど、そのときに、うちの子が入って時は普通だったのに、そんな感じの2年生を見ちゃうと、変っちゃうんじゃないんかっていって、一年生も何かやりませんかって話しを持ちかけられたんです。だけど、別になにも、ことさら問題が起きてるわけじゃないから、それを見回りしてもしょうがないし･･･、で、そこで、1年生の親と子どもたちを全員あつめて、各クラスで話し合いとか、するようにすると、「誰ちゃんのところの親はこの人」っていうのが分かるように、顔を一応覚えましょうっていうことでやったんですけど。で「うちの子もそのうちにだれてくるから、皆さん、よそのお母さんたちも、うちの子の顔をよく見ておいて下さい」って、で、「見かけた

ら注意してください」って。そうしたんですけど、それはすごくよかったなって思う。

S4：親同士のコミュニケーションが取れてるっていいよね。親同士のコミュニケーションが取れてると、ことが大きくならなくてすむっていうのはある。

S3：そうそう、自分の知らない情報が流れてくるから。

S4：だって、全然知らないで、子どもも知らなければ親も知らないっていうと、言えないじゃない。子どもにも直接親が言うのも変だし、親が親の耳にちょっと入れたいって時だって、知らなきゃ言えないもんね。知っててても、うちなんかは狭い地区だから皆知ってるんだけど、やっぱりそれでもコミュニケーションをはかっておいたほうが、スムーズだし。言ってもらえるっていうのはいいよね。

S5：私は、子どもの友達の、親を知りたいの。

S1：そうそう。

S4：私も。

S5：子どもが、誰ちゃんと仲良くしてると、「どんな親なのかな？お友達になりたいな」って思うわけ。それで、学級懇談とかで会ったときは、「始めまして、私は○○の母です。いつもお世話になってます」って。せめて、子どもの友達の親くらいとは、面識があって、なんかあったときには連絡取れるようにはしておきたいとは思うんだけど。

S3：この前、学校でマラソン大会があって、その時、お友達のお母さんに「○○ちゃん頑張って！」って声をかけてもらって、すごく喜んでたのね。その話を聞いたとき、私も嬉しくて、そのお母さんに「ありがとう」って言いたかった。だから、そういう意味で、どこかで子どもも、大人の社会であったり、学校で育ててもらってるから、自分もその中に入らなきゃって思う。

S1：うちは、去年問題があった、○○中学校だったんだけど、あの自殺問題のあった･･･。それでやっぱり、うちもいろいろ PRS1 で話し合って、学校を立て直すには、子どもと先生だけではなくて、親も一緒に入ろうってことで、今みたいな形で、保護者にどんどん学校に来てもらおうって形を今作ってるんですね。で、3 年生の調理実習なんかは、親が一緒に参加するとかして、子どもの本当の姿を見てもらおうってことでやってるんですけど。親が学校に気軽に学校に来られる雰囲気を作って、皆で学校を立て直すんだって、頑張ってるんですけど。

S2：学校の行事なんかも、中学生くらいになると、来て欲しくないみたいで、なかなか学校からの手紙を見せなくなるんですよ。例えば授業参観とか。でも、お母さん同士が知り合いなら、そういう情報も聞くことができるし。

S1：うん。

学校の役割として、まず挙げられたのは「犯罪を犯すとその後どうなるか」、「被害者がどうなるか」を学校で教えて欲しいということであった。Scene.4-12 では「ここまでしたら大変な罪だっていうような犯罪に関する教育が必要」、「犯罪をやられたほうは大変な迷惑であることを教育していくべき」、「マスコミは事件がおきたときは騒ぐけど、その後はどうなるかわからない」と語っている。犯罪という社会的な逸脱行為が、いかに被害者やその家族を苦しめるものであるか、自分や家族が社会的制裁を被るかについて、学校での授業や学校外の専門家による講演を通して、若者に学ぶ機会を与えて欲しいと提言している。

「教育機関としての学校」へのもう一つの提言は、学校における教育体制に関する提言であった。Scene.4-12 では、「落ちこぼれるから非行に走るんじゃないかな」、「勉強できんでも生きていかれる環境つくらな」と語っている。ここでは、「知識の詰め込み」を重視した学校の教育体制を問題点としてあげている。詰め込み式の教育についていけない若者が「不良や非行に走る」（Scene.4-12）ことを憂慮しており、学校生活からドロップアウトした者を社会が排除しないことの必要性を提案している。

さらに、被調査者は、「交流の場」として機能する学校の構築を提言している。例えば、Scene.4-13 では、「『誰ちゃんのところの親はこの人』っていうのが分かるように、顔を覚えましょうっていうことでやった。そこで『うちの子もだらけてくるから、よそのお母さんたちも、うちの子の顔をよく見ておいて下さい』、『見かけたら注意してください』って。それはすごくよかったなって思う。」と、人と人とのつながりを構築する場を学校が提供することが、若者の逸脱行為の抑止につながる可能性を指摘している。また、学校が「親や地域住民が集まれる場」となることを期待するコメントもみられた。それは、Scene.4-13 の「自分もその（学校）中に入らなくてちゃって思う」、「親が学校に気軽に学校に来られる雰囲気を作りたい」という意見に示されている。そして「皆で学校を立て直したい」と、学校と地域との連携を期待し、さらに自分が実際にそこに参加することを希望している。